

## 紙上講習会「カーロイ・ミハーイの生涯を通じてハンガリーの歴史を学ぶ（第1回）」

外国学図書館LSの青山と申します。

「カーロイ・ミハーイの生涯を通じてハンガリーの歴史を学ぶ」と題した紙上講習会を行います。

この講習会の目的は以下の2点です。

- ①カーロイ・ミハーイ（1875-1955）<sup>1</sup>という政治家の生涯について学びながら、彼の生きた20世紀前半のハンガリーの歴史の流れを知ること。
- ②現在のハンガリー政治の場におけるカーロイの扱われ方を知ること、現在のハンガリー政治の特徴を学ぶこと。

### 目次

1. カーロイ・ミハーイとはどんな人？
2. カーロイの生涯①1918年革命まで（ここまで第1回）
3. カーロイの生涯②戦間期以降
4. 撤去されたカーロイの銅像
5. まとめ（ここまで第2回）

---

<sup>1</sup> 本講習会資料ではハンガリー系の人名を姓・名の順で表記する。

## 1. カーロイ・ミハーイとはどんな人？



（画像は Wikipedia [https://hu.wikipedia.org/wiki/Károlyi\\_Mihály\\_\(miniszterelnök\)](https://hu.wikipedia.org/wiki/Károlyi_Mihály_(miniszterelnök)) より）

ブリタニカ国際大百科事典からの引用：

「ハンガリーの政治家。貴族の出身(伯爵)。1910年保守主義者として議会に選出されたが、まもなく左傾、大土地所有の解体、普通選挙権、諸民族の平等、ハンガリーの自治、親スラブ外交を唱えた。第一次世界大戦末期の1918年独立政府<sup>a</sup>首相、次いで大統領。普通選挙権、8時間労働、農地改革などの自由主義諸政策を実施、率先して自分の領地を分配した。しかし領土問題<sup>b</sup>で連合国の譲歩が得られず、1919年辞職、亡命。一貫してホルティ政権<sup>c</sup>を批判。1946年帰国、1947-49年駐フランス大使。ライクの粛清裁判<sup>d</sup>を批判して再度亡命。」

このように事典の説明からは、最初は保守的な貴族政治家であったが、段々と左傾し、自由主義的な政策を行う政治家に変わった人物であることがわかります。

何だか変わった人だな、と思いませんか…??

どうしてこのような経歴をたどることになったのか、彼の生涯をこの後じっくりと見ていきましょう。





その前に、まずは、上記の事典の説明文に出てくるいくつかの専門事項について確認します。

a 独立政府…1918年10月末、ハプスブルクからの完全な独立と国内の民主的改革を試みる革命が起こり、この革命によってカーロイを首班とした政権が樹立。カーロイ政権はハンガリーの共和制を宣言。

b 領土問題…第一次大戦末期の1918年10月はハンガリーだけでなくハプスブルク帝国内の諸民族が次々に独立を宣言した。ハンガリー領内にいた諸民族が、戦勝国である連合国側の支援を受けながら独立を目指したことにより、敗戦国側であるハンガリーの領土縮小が避けられない状況になった。

→その結果、カーロイらは、領土縮小を防ぐにはソビエトの支援を受けながら連合国側に對抗しなければならないと考え、社会民主党左派に政権を譲った。→この結果1919年3月、社民党左派と共産党による共産主義政権が樹立。



なおこの領土問題は、講習会第2回でお話する、近年ハンガリー政府によってカーロイの銅像が撤去された事件ともつながります。

c ホルティ政権…ホルティ・ミクローシュを中心とした右派勢力が上述した共産主義政権に対抗。その結果、1919年8月共産主義政権が崩壊。1920年にホルティを摂政とした権威主義的な政治体制が樹立し、1944年まで続いた。

（なお、ホルティは摂政であり、首相は別にいたことから、厳密にはホルティ「政権」ではなくホルティ「体制」と表記する方が適切。）

d ライクの粛清裁判…1949年ハンガリーにおいて共産党の独裁体制が確立されると、共産党書記長ラーコシ・マーチャーシュによる粛清が行われ、ライク・ラースローもその犠牲に。このような粛清の動きに抗議する形でカーロイは亡命した。



以上の背景知識を確認した上で、次章からは、特にカーロイの政治的キャリアに焦点を当てつつ、彼の生涯を見ていきましょう。

参考：19世紀後半～20世紀前半までのハンガリー政治体制の変化

1867年	オーストリア＝ハンガリー二重君主国の成立。
1918年11月	二重君主国崩壊、カーロイを首班とした共和制国家の成立。
1919年3月	カーロイ政権の崩壊、共産主義政権の樹立。
1919年8月	共産主義政権崩壊。旧カーロイ政権内の右派政治家による一時的な政権が樹立。その間、ホルティによる政権掌握の準備が進む。
1920年3月	ホルティを摂政とした、国王なき王制が成立。
1920年6月	トリアノン条約締結により、国土の3分の2を失う。
1946年2月	王制の崩壊、共和制の樹立。しかし数年後には共産党独裁体制へ。

## 2. カーロイの生涯①1918年革命まで

### 〈政治的活動を始めるまで〉

カーロイは1875年3月4日ブダペストにて誕生した。若い頃はギャンブルなど、大貴族らしい遊びを楽しみながら生活していた一面もあった<sup>2</sup>。

カーロイ家は伝統的に反ハプスブルク・親フランス的であり、また、保守的で厳格なカトリックであった。

カーロイは3歳の時に母親を亡くし、それ以来、いとこ叔父(親のいとこにあたる男性)であるカーロイ・シャーンドルに面倒を見てもらうことが増えた。このカーロイ・シャーンドルと過ごした時間が、カーロイのその後の政治的キャリアに大きな影響を及ぼすことになる。

### 〈いとこ叔父カーロイ・シャーンドルについて〉

カーロイ・シャーンドルはフランスのル・プレーなどの思想の影響を強く受け、西欧の社会学などを熱心に勉強していた<sup>3</sup>。そして農業保護の必要性を訴え、農村へ協同組合を広める運動などを率いた他、様々な慈悲活動も行った<sup>4</sup>。カーロイ・シャーンドルは当時の多くの大貴族とは異なり、積極的に下層の人々の生活改善を目指した活動をしていたのである。そしてカーロイも、カーロイ・シャーンドルから多くのことを学び、やがて彼の活動を引き継いでいった。

---

<sup>2</sup> Cartledge, pp.17-18.

<sup>3</sup> Anka, 2006

<sup>4</sup> Ibid.

### 〈政治的活動の始まり〉

1901年の総選挙で、与党である自由党から、シラージ県のジラフ選挙区にて出馬したことが政治的活動の始まりであった。この時は協同組合を通じた農業保護などを掲げるも、結局選挙には敗れた<sup>5</sup>。

次に1905年の総選挙で無所属・独立派（以下、ハプスブルク帝国からの独立を支持する派閥を「独立派」と称す）として、カーロイの所有地でもあるヘヴェシュ県のペーテルヴァーシャーラ選挙区にて出馬し当選した。この時の選挙運動では、協同組合法の制定、国外へのハンガリー人の移住の制限、独立関税圏による農業保護の必要性などを主張した。また、この時期はハンガリー全体で、当時の首相である自由党のティサ・イシュトバーンへの不満が高まっており、カーロイもティサの批判をした<sup>6</sup>。

当選後、ハプスブルク帝国からの独立を求める政党である、野党の独立党に入党した。しかしその後あまり熱心に議員の仕事を行わず、さらに1906年の選挙時には国外へいたため立候補できず、別の独立派の候補者に譲ることになった<sup>7</sup>。それ以降、しばらくは大きな政治的活動は行わなかったが、1906年に亡くなったカーロイ・シャーンドルの遺志を継ぎ、農業保護運動には携わった。

### 〈1909-12年〉

1909年独立党の内部分裂により、カーロイは無所属となった。また、同年「全国農会」の会長に選出された。（全国農会は主に大土地を所有する大貴族層の利益団体である。）会長として1912年まで任務し、その間具体的な改革などは成し遂げなかったものの、それまで少なかった中小貴族層を会員として取り込むことに成功した<sup>8</sup>。これには、没落しつつあった中小貴族層の救済を主張していたカーロイ・シャーンドルの影響もあったといえる。また、会長任期中は、与野党問わず様々な派閥と関わり、中立的立場に立っていた。

1912年6月、議会でカーロイとティサが激しく衝突する事件が起こった。この後カーロイは全国農会会長を辞任し、左派と積極的に活動し急進化していくことから、先行研究ではこの事件をカーロイ左傾化のターニングポイントとすることも多い<sup>9</sup>。しかしここまで述べたように、カーロイはこの事件より前から、既に他の大貴族とは異なり、協同組合運動などを通じて、下層の人々の社会・経済的問題についても考えていたのである。

---

<sup>5</sup> Hajdu, 1978, p.36., Ruzsoly, 1968, p.911.より [ *Szilágy* (シラージ) , 1901. szep. 29., 1901. okt. 6.]

<sup>6</sup> *Heves vármegyei Hírlap* (以下 *HvH* とする) , 1905. jan. 29.

<sup>7</sup> Hajdu, 1978, pp.49-50., Ruzsoly, 1968, p.912.

<sup>8</sup> 家田、1987年(4)、p.88.

<sup>9</sup> Hajdu, 1975, p.149.など。

### 〈1913年～第一次世界大戦期〉

1913年カーロイが中心となって独立党が再統一し、翌年には党首になった<sup>10</sup>。

対戦勃発の直前であった1914年の春、カーロイは社会民主党指導部や独立党指導部の人物らとともに渡米し、アメリカのハンガリー系労働者に自分たちのハンガリー民主化政策を訴える活動を行った<sup>11</sup>。

戦争勃発時、独立党全体としては戦争に賛成の立場をとるも、カーロイ自身は賛成か反対かで揺れ動いていた。しかし1915年、実際に戦場へ出向き、そこで兵士の実情を目の当たりにしたことをきっかけに、本格的に反戦的立場に立つようになった<sup>12</sup>。この後本格的に反戦の主張や民主化の必要性を訴える活動を行い、民衆の支持を得るようになった。

1916年には、独立党からカーロイをはじめ急進的立場をとる党員が離党し、通称「カーロイ党」と呼ばれる政党をつくった。カーロイ党は主にハンガリーの独立、戦争の終結、国内の民主的諸改革（普通選挙の実施、土地改革など）を綱領として掲げた<sup>13</sup>。

### 〈1918-19年革命期〉

1918年10月23日、カーロイ党、市民急進党<sup>14</sup>、社会民主党によって「ハンガリー国民評議会 Magyar Nemzeti Tanács」が成立した。同年10月末、兵士や労働者を中心に、国民評議会による政権及び共和制の樹立を求める革命的運動がおこり、その結果国民評議会を中心とした政権が成立した。この革命的運動の中で、保守派の代表的存在であり、また戦争を推し進めてきたティサが、何者かによって暗殺された。

1918年11月16日、ハンガリーの共和国宣言がされ、首相はカーロイになった。これがハンガリー史における初めての正式な共和制樹立となった。

ハンガリーは第一次大戦の敗戦国側であったことから、講和条約の締結などを巡り協商国側との交渉が難航した。そして国内の少数民族も協商国の支持を得て独立を宣言し、ハンガリーの領土縮小が避けられない状況になった。このような外政面での多大な困難によって、本来カーロイ政権が取り組みたかった様々な内政の民主主義的な改革も大幅に遅れ、人々も不満をもつようになった。結局1919年3月、カーロイ政権は崩壊し、共産主義政権が樹立された。

---

<sup>10</sup> Hajdu, 1978, p.141.

<sup>11</sup> カーロイが「民主主義的伯爵」と紹介されるなど、ここでのハンガリー系の民衆との接触について、アメリカの新聞でも取り上げられた。(Hajdu, 1978, pp.157-160.より [ *Amerikai Magyar Népszava*(アメリカのハンガリー人民の声), 1914. április. 17.)

<sup>12</sup> Hajdu, 1978, p.185., Károlyi, 1923, pp.155-157.

<sup>13</sup> Mérei, 1971, pp.307-311,

<sup>14</sup> 市民急進党とは、ヤーシ・オスカーという知識人を党首として、都市の知識人層を中心に1914年に結成された政党であり、リベラルな民主主義的改革を掲げていた。

### 📍ここまでのポイントの整理

- ☑️カーロイは若い頃からいとは叔父の教えを受け、下層の人々の社会・経済的問題について関心をもっていた。
- ☑️1912年以降、本格的に立場が急進化し、普通選挙や土地改革などの政策を求めるようになった。
- ☑️第一次大戦期には国内の反戦運動の中心的存在になり、国内での影響力も高くなった。
- ☑️1918年10月末の革命後に成立したカーロイ政権は、普通選挙をはじめとした内政の改革を目指すも、第一次大戦直後という特異な状況によって実現できなかった。



次回の紙上講習会では、革命崩壊後のカーロイの活動について整理するとともに、革命崩壊後～現在までのカーロイの評価の変化や、最近カーロイの評価を巡って起こったある事件について解説する予定です。  
最後まで読んでいただき、ありがとうございました(^▽^)/

### 〈参考文献一覧〉

- 家田修「ハンガリー『近代』における『農業危機』と農業政策：中小地主の農本主義と協同組合運動」『広島大学経済論叢』第10巻第2号—第11巻第2,3号、1986-1987年
- Anka, László, Károlyi Sándor, az agráriusok vezér (カーロイ・シャーンドル：農本主義派の指導者), *Valóság*, 49.évf. 11.sz., 2006, pp.23-48.
- Cartledge, Bryan, *Mihály Károlyi & István Bethlen : Hungary (Makers of the Modern World : The peace conferences of 1919-23 and their aftermath)*, London, Haus Publishing Ltd, 2009
- Hajdu, Tibor, Károlyi Mihály politikai pályafutásának kezdete (1901-1909) (カーロイ・ミハーイの政治的活動の始まり：1901-1909年), *Történelmi Szemle*, 2-3.sz., 1975, pp.149-174.
- Hajdu, Tibor, *Károlyi Mihály : politikai életrajz* (カーロイ・ミハーイ：政治家としての伝記), Budapest, Kossuth Könyvkiadó, 1978
- Jemnitz, János és Litván, György, *Szerette az igazságot : Károlyi Mihály élete* (彼は真実を好んだ：カーロイ・ミハーイの一生), Budapest, Gondolat Kiadó, 1977
- Károlyi, Mihály, *Egy Egész Világ Ellen* (一つの世界全体に対して), Verlag Für Kulturpolitik, München, 1923

Mérei, Gyula, *A magyar polgári pártok programjai 1867-1918* (ハンガリー市民系諸政党の諸綱領：1867-1918年), Budapest, Akadémiai Kiadó, 1971

Ruzoly, József, József, Három választás. Adatok Károlyi Mihály politikai pályakezdéséhez. (3度の選挙：カーロイ・ミハーイの政治的活動の始まりに関する資料), *Tiszatáj*, 10.sz., 1968, pp.910-914.

*Heves vármegyei Hírlap* (ヘヴェシュ県新聞)

【PR】

外国学図書館LSの紙上講習会バックナンバーを図書館Webサイトについて公開中

[https://www.library.osaka-u.ac.jp/ta\\_lectures/](https://www.library.osaka-u.ac.jp/ta_lectures/)



<2020年12月現在の既刊>

- 教職を志す者必見！ 現役高校教員LSのおススメ名作映画集
- 2020年のアメリカと映画館
- チェンマイでは、ゆっくり、あるくこと。
- イラン留学体験記（第1部：イランでの生活について）
- イラン留学体験記（第2部：イラン滞在中の印象的な出来事）